

選 評 「書きたいことに出会うために」

藤田 のぼる

今回、初めて優秀賞の受賞者が出たことは、選考に加わった者としてうれしいことでした。優秀賞の「愛や魔がある」のもっとも評価したいのは、「短編作品」としてきちんと意識されている、という点でした。この点では、「鈴虫」にも、そうした自覚が感じられました。ただ枚数が少ないだけでは、本当の短編とはいえません。短編には短編でなければならない（もちろん長編には長編でなければならない）題材や方法があります。作家の短編集やアンソロジー（いろいろな作家の短編を集めて一冊にしたもの）を読んで、そうした技法を感じ取ってほしいと思います。

今回、論説・評論は応募が少なかったのですが、そうした中で芥川の「地獄変」を論じた「Which do you select life or art?」が奨励賞に選ばれたことも、うれしいことでした。評論を書く側にも、固有のモチーフ、つまりその作品をどうしても取り上げたいと思った動機、があるはずです。察するに、自分の娘が炎に焼かれていく姿を前にして助けないどころか絵に書こうとするという、言わば反道徳的なストーリーに、若山君は疑問と共にある関心～いったい、作者はそういう物語を通じてなにを言いたかったのか？～を抱いたのだと思います。それは首肯できますが、だからこそ「芸術至上主義」というような既成の言葉で説明してしまうのではなくて、徹底して自分の言葉で「攻めて」ほしかったと思います。

「虹の声」は、構成といい、人物配置といい、かなり良くできた作品だったと思います。ただ一応の合格点ではあるけれど、まだ物足りないところのある作品でもありました。主人公・隆司の「虹に触ってみたい」という気持ちを、読者がどれだけ共有できるか。今のままだと、読者にとって「いいお話」ではあるけれど、心を動かされる話には、多分ならないでしょう。それは、作者自身がなぜこういうストーリーを書こうとするのかを、深めていくことでもあると思います。それを見極めるには、やはりある程度たくさんの作品を書くということも大切です。他の応募者の方たちにもいえることですが、自分を信じ、何度か書き直したり、新しい作品を書いていく中で、自分が本当に書きたいものを少しずつ、発見して行ってほしいと思います。